

### 第3部 中学校時代

旧制の中学校は 1872(明治 5)年の学制によって創設された中等教育機関。1881(明治 14)年に男子の学校とされた。1886(明治 19)年の中学校令によって 5 年制の尋常中学校となったが、1899(明治 32)年に中学校に復した。その際、男子に必要な「高等普通教育」を授けることが目的とされた。旧制中学校の多くは戦後の学制改革によって新制高等学校となり、現在に至っている。

旧制の学校系統は、尋常小学校卒業後に初等後教育機関（高等小学校や実業補習学校などの青年学校系統）と中等教育機関に分岐する複線構造をとっていたが、中学校は中等教育機関の中でも高等教育機関に至る上でもっとも正統的なルートとして位置づけられており、学歴取得による社会的上昇を旨とする男子にとって第一の進学目標となった。進学熱の上昇を受けて旧制中学校の数と生徒数は大正期に急拡大し、1920(大正 9)年に 4 万 7 千人あまりだった入学者数は、丸山眞男が進学する前年の 1925(大正 14)年には 7 万 5 千人弱となった。それでも同学年男子の 10%ほどに過ぎない。1919(大正 8)年には、中学校を 4 年間で修了して高等学校に進学できる「四修」という制度が導入されている。

丸山眞男と加藤周一が進学した東京府立第一中学校（通称「一中」）は 1878(明治 11)年に開学した東京府第一中学の後身にあたり、第一高等学校進学者を多く輩出した名門校。丸山在学中の 1929(昭和 4)年に東京市麴町区西日比谷町から麴町区永田町に移転した（1932 年まで府立高等学校と同居）。1948(昭和 23)年に新制の東京都立第一高等学校となり、1950(昭和 25)年に東京都立日比谷高等学校に改称した。